

川田谷古墳群を支えた古墳時代のくらし



桶川市は、原始古代の遺跡の宝庫として知られ、とくに、川田谷地区には、6～7世紀の古墳群である川田谷古墳群が所在しており、荒川流域左岸の古墳時代後期を物語る上で拠点となる地域と考えられています。

この古墳群を支えた集落跡のひとつである八幡耕地遺跡から発見された資料を紹介するとともに、古墳群を支えた人びとのくらしについて考えます。

展示期間：平成30年11月17日（土）～12月23日（日・祝）

〔関連事業〕

- 展示解説講座 『八幡耕地遺跡にみる古墳時代後期の暮らし』
講師：桶川市歴史民俗資料館 館長 関根 訪
平成30年11月23日（金・祝） 午後2時開講
- 特別文化財講座 『群集墳と集落の展開について』
講師：（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団職員 青木 弘 氏
平成30年12月16日（日） 午後2時開講



古墳時代のムラ 八幡耕地遺跡の幕開け

八幡耕地遺跡は、桶川市の西部にあたる川田谷地区の南部にあって、西に荒川の低地を望む台地上に存在する。

この遺跡は、地元の人びとによって江戸時代から続けられた荒川の河川敷の肥沃な土壌の厚い客土に覆われていたために、それまで遺跡であるとは知られていなかった。

昭和55年の調査をきっかけとして遺跡の範囲を検討したところ、その規模が40,000㎡を超える古墳時代の大規模な集落遺跡であるとわかった。

古墳時代の八幡耕地遺跡は、古墳時代中期すなわち5世紀に始まる。

熊野神社古墳が築かれた古墳時代前期にあたる4世紀の集落は、荒川低地を望む台地上に展開する。これらの遺跡は5世紀に入ると急激に縮小し、あらたに小河川の谷沿いに小規模な集落が点在するようになる。八幡耕地遺跡の始まりも、遺跡の北側の谷に沿う小さな集落として始まる。



八幡耕地遺跡第1次発掘調査区



八幡耕地遺跡発掘調査地点図

古墳時代の文化は、古墳と祭祀をともにしながら、大古墳が築かれる近畿地方を中心に地方へと広がっていく。古墳時代中期の祭祀は、石製の鏡や剣の模造品を用いるようになり、八幡耕地遺跡の出土品にも現れている。

このことは、近畿地方において、大阪平野に菅田御廟山古墳などの巨大古墳を築いた勢力によって、社会の仕組みがかわっていったことを示しているという。

【土師器（古墳時代中期）】



展示資料10 甕形土器



展示資料5 高环形土器



展示資料3 坩形土器

【石製模造品（古墳時代中期）】



展示資料11 有孔円盤



展示資料12 剣形模造品 未製品

愛宕耕地遺跡にみる新たな暮らし

愛宕耕地遺跡は、桶川市上日出谷にあり、江川の谷がさらに分かれて東へ入り込む谷沿いの台地上にある古墳時代中期の集落遺跡である。

発掘調査は、昭和56年（1981）、62年（1987）、平成元年（1989）の3回実施されており、古墳時代中期の住居跡は6軒発見されている。

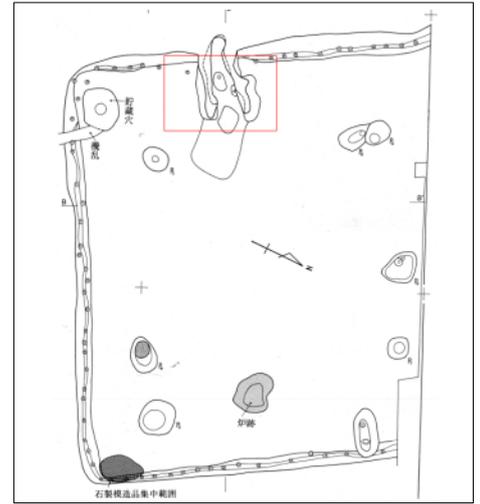
このうち、昭和62年に発掘調査された調査地点からは、古墳時代中期における生活文化の移り変わりを示す住居跡が発見されている。

すなわち、弥生時代以来の床の炉に加えて、たて穴住居の壁に「かまど」が設えられていた。

かまどを煮炊きに用いる生活は、5世紀以降に盛んになる朝鮮半島との交流の影響によって広まっていったといわれる。



第3号住居跡 かまど内遺物出土状況



第3号住居跡実測図



【第3号住居跡出土石製模造品】

【かまど内から出土した土師器】



展示資料15 甕形土器



展示資料13 高坏形土器
かまど支脚に転用

また、同じ住居跡からは、95点の滑石製白玉と1点の剣形模造品が発見されている。

剣形模造品は八幡耕地遺跡第1次発掘調査においても有孔円盤とともに見つかり、家のまつりに用いられたものである。これらが発見された家屋の一隅は、神をまつる場であったかもしれない。

参考資料：『愛宕耕地遺跡第1・2次発掘調査報告書』
愛宕耕地遺跡発掘調査会 1999

庚塚遺跡 -玉作のムラ-

八幡耕地遺跡や愛宕耕地遺跡で発見された石製模造品は、古墳時代中期の古墳や住居でまつりに用いられたものである。

北本市市戸宿5丁目の庚塚遺跡は、荒川低地を西方に望む台地上に立地し、1軒の住居跡から石製模造品の工房跡が発見された。

これらは、成品・未成品を含め、剣・有孔円盤・白玉・刀子・勾玉などである。とくに、白玉の製作工程品が多く発見され、700点を超える。

ここで、祭器の生産が行われていたことを示している。



第4号住居跡 石製模造品出土状況

【第4号住居跡出土石製模造品】



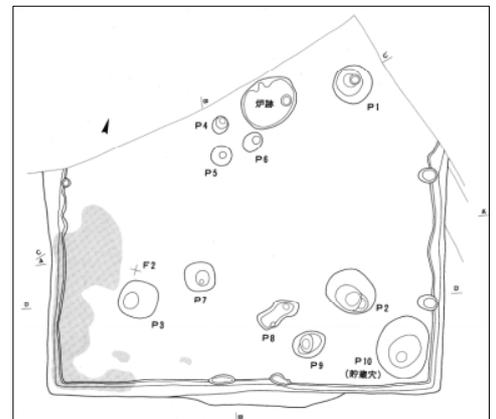
展示資料23 勾玉



展示資料25 刀子



展示資料24 有孔円盤



第4号住居跡実測図

参考資料：『庚塚遺跡』北本市埋蔵文化財調査報告書第8集 1999 北本市教育委員会

一解説 石製模造品について

古墳時代中期（5世紀）になると、大阪平野に巨大古墳が築かれたように、近畿地方の倭王権の力は強大となる。地方の古墳の副葬品も甲冑など軍事的な器物が増え、前期古墳に見られた硬玉や碧玉の玉や石製品などは、滑石製の簡素なものへと変わっていく。

同様の石製品は、集団のまつりの場である祭祀遺跡にも用いられるようになり、さらに家屋の中からも発見されるようになる。すなわち、古墳祭祀を特徴づけた勾玉、銅鏡、剣などが石製の模造品となって、家のまつりにも取り入れられていったことを示している。

八幡耕地遺跡に見る古墳時代の暮らし

昭和55年に最初の発掘調査を行って以来、八幡耕地遺跡では8回の発掘調査を行い、約40軒の住居跡が発見されている。第4次調査で発見されたたて穴住居を覆う土の中に黄褐色の火山灰が見ついている。この火山灰は、榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA) と呼ばれているもので、6世紀はじめに榛名山の噴火による。

6世紀を通じて、大古墳が継続して築かれた埼玉古墳群でも、最古の稲荷山古墳は築かれてまもなくこの火山灰におおわれている。すなわち、榛名山の火山灰は、関東地方の古墳時代後期の幕開けを知る鍵層となっている。

右の土器は、この火山灰が降った直後に営まれた住居から発見されたものである。



展示資料26 坏形土器

八幡耕地遺跡は、6世紀に入ると遺跡の範囲を拡大し、桶川市域では最大の古墳時代後期の集落として成長している。一方で、荒川に沿う台地には、小型の古墳が次々と築かれ、県南部では規模の大きい、「川田谷古墳群」が成立している。すなわち、八幡耕地遺跡は川田谷古墳群を支えた拠点集落であった。

古墳時代後期の暮らしの場となった住居を特徴づけるのが、かまどの設置である。かまどは、5世紀に朝鮮半島南部から倭国にもたらされたとされる。

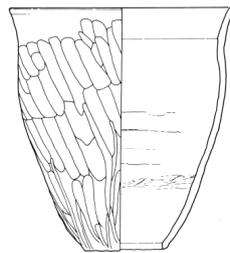
かまどは、「古墳時代の台所革命」といわれるほどに暮らしに次のように大きな変化をもたらした。

- ・長甕と大型甕（こしき）による煮炊き
- ・坏（つき）が食器として多く用いられるようになった

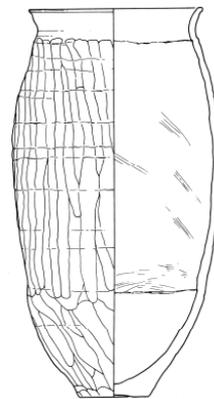
かまどによる調理

かまどの登場により、甕の中で煮る調理に加え、高火力で蒸すという調理方法が可能となった。坏は銘々用の手持ち食器として多く使用されるようになった。

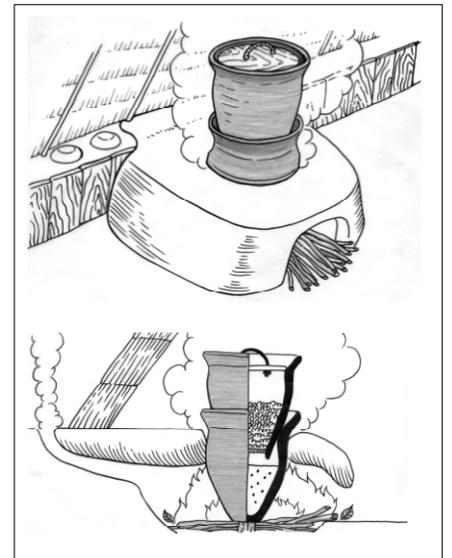
これは、米や粟を蒸して貯蔵し、粥にして食べるという食事のスタイルがかまどとともに導入されたことによると考えられる。



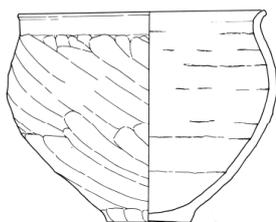
展示資料48 甕形土器



展示資料49 甕形土器



かまどによる調理 復原図



展示資料41 鉢形土器



展示資料68 坏形土器



展示資料48 坏形土器



八幡耕地遺跡第2次調査 第2号住居跡

かまどと家のまつり

八幡耕地遺跡では、かまどのまわりから、甕や坏といった調理や食事を使う道具のほかに、高坏や須恵器、そして、まつりに使う石製の玉や土玉が発見される。

このことは、家屋の中でかまどが神聖な場所として考えられ、ここで、まつりが行われたことを示している。

弥生時代以来の供え物に使う器である高坏は、6世紀の半ば以降に数を減らし、やがて、朝鮮半島から渡来した技術によって焼かれた堅い灰褐色の須恵器がまつりに用いられるようになる。



展示資料44 土玉



展示資料57 珠文鏡



展示資料56 石製紡錘車



展示資料55 剣形模造品



展示資料54 管玉



展示資料51 須恵器はそう

解説 はじき すえき —土師器と須恵器—

古墳時代後期の土器には、弥生時代以来の伝統を引き継ぐ赤く焼かれた土師器と硬く焼きしめられた須恵器がともにある。



甕形土器



甑（こしき）形土器



高坏形土器



坏形土器

古墳時代の素焼きの土器を土師器と呼ぶ。土師器は、日々の暮らしの中で使われた器であり、古墳時代後期における器の種類は煮炊きにつかう甕と甑、供え物に使う高坏、食器であろう鉢と碗。加えて坏がたくさん用いられている。

坏形土器のうち、上の坏は、古墳時代後期の関東地方に典型的な器形で、須恵器の坏を模倣したものである。

須恵器は、朝鮮半島南部の陶質土器を起源として5世紀前半に大阪府の陶邑窯跡群をはじめとする西日本で生産が始まる。轆轤（ろくろ）を用いて成形し、窖窯（あながま）で焼成される。

その生産は、倭王権の管理のもとで行われ、5世紀末から6世紀には東日本でも生産が始まる。県内では東松山市の桜山窯跡では6世紀前半の窯跡が発見されている。

【桶川市内から発見された須恵器】



氷川神社裏古墳



八幡耕地遺跡

古墳時代後期の須恵器は、古墳の副葬品や祭器とされ、住居の暮らしで用いられることは少ない。



解説 —土師器が物語ること—

土師器、須恵器、さらには古墳に置かれる埴輪などの土器は、古墳時代の手工業製品である。

これらの手工業生産の流通は、どのような社会組織の中で実現していたのであろうか。大量に消費され、八幡耕地遺跡をはじめとする近隣の遺跡からも多く出土する土師器の坏について観察してみたい。



有段口縁坏



比企型坏



小針型坏

有段口縁坏 黒く燻され、口縁部に段をもつ

比企型坏 口縁部外側と内面を赤く彩色し、へら削りによって薄く成形されている

小針型坏 口縁部が大きく外反し、身の浅い大型の坏で白色に焼きしめられている

有段口縁坏は埼玉県北部から群馬県の平野部に、比企型坏は比企、入間地方から多摩地方にそれぞれ分布している。小針型坏は、埼玉古墳群とその周辺の遺跡から発見され、古代の武蔵国を支配した勢力を背景とする。

これらの分布範囲は、互いに重なり、古墳時代の地域交流を知る手がかりとなる。

桶川の遺跡に見る土器の交流

八幡耕地遺跡は、入間川の流域にあり、赤い比企型坏が使われる地域であったが、白い小針型坏も見つかっている。このことは、足立地方では最大級の川田谷古墳群を築いた人びとが埼玉古墳群を築いた大勢力と交流をもっていたことを示しているのだろう。

一方、綾瀬川流域にあたる桶川市加納の宮ノ脇遺跡では、赤い比企型坏とともに、黒い有段口縁坏が発見されている。有段口縁坏は、武蔵国の南部にあたる川崎市や横浜市あたりからも多く発見されている。

古墳時代後期に武蔵北部の埼玉古墳群周辺から川筋を南下して東京湾に至る交易路が開かれ、宮ノ脇遺跡はその途中にあると推測される。

八幡耕地遺跡



展示資料68 坏形土器

宮ノ脇遺跡



展示資料61 坏形土器

古墳時代後期のまつり

古墳時代後期（6世紀）になると、古墳に祭器としての玉類が副葬されることは少なくなる。古墳から須恵器が発見されるようになるが、供献具であって自身が呪力を発揮するものではないだろう。

古墳は、横穴式石室をもつ家族墓的な群集墳の造営が盛んになり、まつりの場である意味を失っていく。

6世紀には、祭具に土製品が多く見られるようになり、石製品に加えて、土玉や土製の円盤、さらには人物や馬を模した土製品も見られるようになる。まつりの場も、巨岩や川や湧水などを対象として祭祀遺跡が営まれるようになる。

また、展示資料のとおり、かまどから土玉や石製模造品が、土師器や須恵器の供献具をともなって発見される。ここで営まれる家のまつりとはいかなるものであろうか。

万葉集巻14（東歌）

には鳥の葛飾早稲を饗（にえ）すともその愛しきを外に立てめやも(3386)

誰そこの屋の戸押そぶる新嘗（にいなめ）に我が背を遣りて齋ふこの戸を(3460)

この歌は、家の主婦である刀自（とじ）が、夫を外に出して家にこもり、神を迎えて収穫した稲を供える年中行事を歌った万葉集の東歌である。想像をたくましくすれば、みのりをもたらず田の土をとって土玉をかまどで焼き、これを祭器として、初穂を神に供えるまつりが家々で行われていたのだろうか。

楽中遺跡

楽中遺跡は、八幡耕地遺跡の南に位置し、荒川の支流である江川の谷を望む台地上にある。ここは、川田谷古墳群における樋詰支群とも重なり、遺跡内に古墳時代後期の古墳が分布している。昭和62年（1987）の第1次発掘調査によって、古墳時代後期の集落遺跡であることがわかった。

まつりに使われたであろう土玉31点はすべてかまどの中から発見されており、カマドの傍らからは土玉の原料であろう粘土の塊も発見されている。

家の中のまつりでつかわれる土玉を、身近な素材である粘土から、かまどの火で焼いて作ったのであろうか。

参考資料：『楽中遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第429集
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2017



展示資料78 土玉（一部）



第5号住居跡 かまど内土玉出土状況

中三谷遺跡

中三谷遺跡は、鴻巣市にあり、元荒川に沿う谷に埋没した台地上にある集落遺跡である。古墳時代には中三谷遺跡から元荒川をさかのぼると行田市の埼玉古墳群に至る。

昭和60年から61年（1985～1986）に、埼玉県警察運転免許センター建設に先立って、発掘調査が行われ、古墳時代後期の住居跡25軒が発見された。

第21号住居跡のかまど内から、16点の土玉がネックレス状に連結された状態で発見された。かまどの火力を利用して土玉を製造したとも考えられるが、住居跡を廃棄するとき、一連の土玉を坏型土器とともにかまどに供えるまつりが行われたことも考えられる。

参考資料：『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989



第21号住居跡 かまど内土玉出土状況

上敷免遺跡



第84号住居跡 子持勾玉出土状況

上敷免遺跡は深谷市の北東部にあり、利根川流域の自然堤防上に営まれた大規模な集落遺跡である。古墳時代後期の住居跡から、かまどを中心にさまざまな祭りが行われていたことを示す出土品が発見されている。

第84号住居跡のかまど内から石製の子持勾玉とその周辺からは4点の白玉が、第161号住居跡ではかまどの火床面から滑石製白玉5点が見つかった。

子持勾玉は、勾玉のもつ呪力を一層増すために小形の勾玉を付け加えたもので、祭祀遺跡から発見されることが多く、住居の中から発見されることはまれである。

子持勾玉が住居のかまどから出土することは、ここで行われたまつりが重要なものであったと考えられる。

【第169号住居跡出土品】



展示資料93 子持勾玉



展示資料87 勾玉



展示資料92 須恵器杯



展示資料91 高坏形土器



展示資料90 高坏形土器

参考資料：『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993

川田谷古墳群の終末 城髪山2号墳と氷川神社裏古墳

『日本書紀』大化2年（646年）3月22日条に記されている薄葬令によって、古墳の造営は停止した。薄葬令は、地方豪族を押さえ中央集権国家の建設へと進む国作りの基本となるものであり、ここに事実上の古墳時代は終わる。川田谷古墳群においては、7世紀前半に築かれた城髪山2号墳と上日出谷地区の氷川神社裏古墳が終末期の古墳である。

城髪山2号墳

川田谷古墳群では、川田谷古墳群柏原支群にあった城髪山（しらがやま）2号墳が最後に築かれた古墳とされる。

全長4.20mの横穴式石室は、前室を備える複室構造の墓室をもち、その側壁が張り出し、床面には厚く小石が敷き詰められた入念な作りとなっている。

墓室から発見された副葬品の中には、短刀や鉄鎌などの武具の他、玉類が22点あり、水晶切子玉、碧玉製管玉、琥珀製棗（なつめ）玉、ガラス小玉、金銅製空（うつろ）玉と多種にわたる。

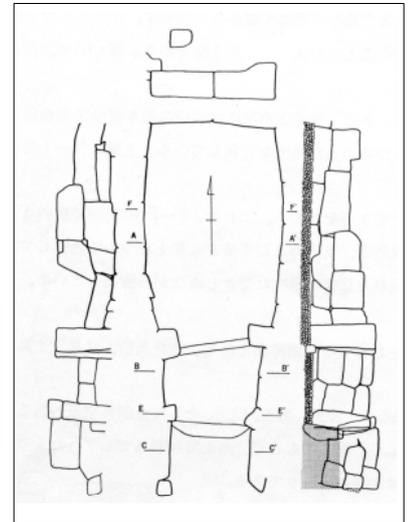
【城髪山2号墳出土品】



この古墳の年代は石室の形態や副葬品の多様な玉から7世紀まで下ると判断される。

参考資料：『川田谷古墳群』桶川市文化財調査報告書第10集
桶川市教育委員会 昭和53年

展示資料110 水晶切子玉



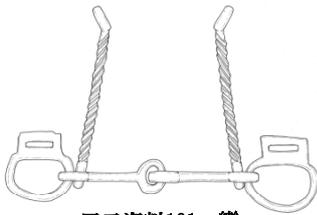
横穴式石室実測図

氷川神社裏古墳

一方、川田谷古墳群からは離れ、江川の谷沿いにあたる上日出谷の氷川神社裏古墳も同じく7世紀前半の古墳である。石室の形は城髪山2号墳によく似ており、遺物は、展示資料の馬具、須恵器があり、いずれも石室の墓道から出土したものである。

とくに馬具の中で轡（くつわ）に注目したい。環状の鏡板が着いた轡は、中央貴族と結びつき、騎兵として組織されていた地方豪族に用いられたともいわれている。

【氷川神社裏古墳出土品 馬具】



展示資料101 轡

【氷川神社裏古墳出土品 須恵器】



展示資料102 平瓶

展示資料103 須恵器高杯



展示資料100 轡

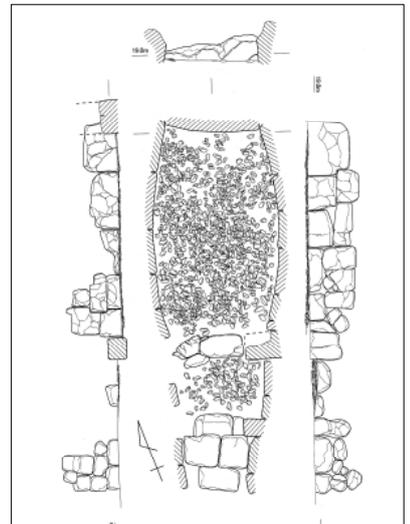
展示資料99 鉄鎌



展示資料104 平瓶

展示資料105 長頸瓶

参考資料：『氷川神社裏古墳 宮遺跡—第3次発掘調査』 宮遺跡発掘調査会 平成19年



横穴式石室実測図

平成30年度 第2回企画展示

『川田谷古墳群を支えた古墳時代の暮らし』

発行日 平成30年11月

編集・発行 桶川市歴史民俗資料館

協力機関（順不同、敬称略）

埼玉県立さきたま史跡の博物館

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

北本市教育委員会